

## 国際機関で実感した英語の重要性



Importance of English presentation skills at the international level

兵藤 誠

HYODO Makoto

いであ株式会社  
フロンティア事業本部/技術開発部

## 1. はじめに

私はスイスのジュネーブにある世界気象機関 (World Meteorological Organization ; WMO) に、2004年7月から2006年8月まで赴任し、洪水管理共同プログラム (Associated Programme on Flood Management ; APFM) にプロジェクト・オフィサーとして従事した。幸いなことに、帰国した現在でも、APFMの活動に様々な形で関わっている。ここでは、WMOとAPFMの活動内容について簡単に紹介し、その活動を通して経験した国際機関で働くことの厳しさや楽しさ、今後取り組まなければならないと感じたこと等について記述する。

日本で国際協力といえば、「国際協力機構 (JICA) 等を通じて開発途上国の現場で活動する」というイメージが

強いが、実際には多くの国連機関やNGO等を含む様々な国際機関が関わっている。本稿では国連という視点から、国際協力に関する取組みについて紹介する。

## 2. 国際色豊かな町ジュネーブ

ジュネーブはアルプス山脈とジュラ山脈の間、スイスの西南端、そしてスイス最大の湖であるレマン湖の出口に位置する自然に恵まれた美しい町である。また、西ヨーロッパの中央という恵まれた地理的条件や歴史的背景から、国際政治とビジネスの中心地として発展している。ジュネーブ市の人口は17万人程度であるが、内40%が外国人という国際色豊かな町である。スイスの公用語はドイツ語 (65%)、フランス語 (18%)、イタリア語 (10%)、ロマンシュ語 (1%) であり、ジュネーブはフランス語圏である。英語は公用語ではない。ジュネーブにあるショップやレストランでは、英語の説明がない商品やメニュー、英語を話さないスタッフも多いため、フランス語が話せない者にとっては、ジュネーブで生活することはなかなか大変である。

## 3. 世界気象機関 (WMO)

WMOは1873年設立の国際気象機関 (IMO) を前身として、1950年より運営を開始した「大気圏の現象、大気圏と海洋との相互作用、気候、及びそれら



■写真2—レマン湖の東端にあるモントルー



■写真3—世界気象機関 (WMO)

によってもたらされる水資源に関する国連の専門機関」である。2007年7月現在、188の加盟国と属領をメンバーとしている。気象・気候や水循環には国境がなく、また、自然災害の約90%が気候や水に起因するものであり、それらに対応するには地球規模での国際協力が必要である。WMOは、その国際協力の枠組みを構築する上で重要な役割を担っている。

## 4. APFM設立の背景

国連の枠組みの中での水問題は、1977年の国連マルデルプラダ会議から議論されるようになった。水と環境に関する国際会議 (1992年のダブリン会議) や国連環境開発会議 (1992年のリオ・デ・ジャネイロにおける地球サミット) では、統合水資源管理 (Integrated Water Resources Management ; IWRM) という言葉が広く用いられるようになり、水問題に対する具体的な行動について議論されるようになった。

世界水パートナーシップ (Global Water Partnership ; GWP) によると、IWRMとは「水や土地、その他関連資源の調整をはかりながら開発・管理していくプロセス」のことである。その目的は、欠かすことのできない生態系の持続発展性を損なうことなく、開発・管理された結果として生じる経済的・社会的福利を、公平な方法で最大限にまで増大させることである。そして現在、この理念は国際的に広く受け入れられている。

しかしながら、IWRMでは水循環を一環的に捉えることを提唱しているにもかかわらず、水資源問題の焦点は、水資源の公平な配分や渇水問題等の「少ない水 (利水)」に関するものに多くを当てられ、洪水等の「多い水 (治水)」については、必ずしも十分に議論されてきたと

は言えない。恐らく、IWRMの議論がアジアではなく、欧米を中心に行われてきたことが、その理由の一つであろう。

洪水は時として災害を引き起こす一方で、農業等の開発ポテンシャルが高い肥沃な大地を形成する等、人々に便益ももたらすという両側面を持った興味深い現象である。洪水は水循環の中で大変重要な要素であり、IWRMの枠組みの中に適切に取り込まれる必要がある。

このような背景の下、APFMがWMOとGWPの共同イニシアチブとして、2001年8月に設立された。

## 5. APFMの活動

APFMは統合洪水管理 (Integrated Flood Management ; IFM) という理念を作り上げ、その理念を実際の洪水管理の中で実施できるように促進し、また、IWRMの中に適切に組み込まれることを目的として、必要となる様々な活動を行っている。

APFMの事務局はWMOの水文・水資源部内にあり、そのスタッフは4~5人程度の少人数で活動している。しかしながら、WMOの水文・水資源部のスタッフは各地域 (例えばアジア地域) を担当しており、APFMの関連する地域の活動には、その地域担当をしているWMOのスタッフが参加するため、実際にはWMO内だけでも十数人がAPFMに関わっていることになる。

IFMとは、APFMの活動の中で最初に作り上げられた理念であり、「環境に配慮しつつ、洪水氾濫原を効率的に利用し、氾濫原から得られる便益を最大化することで、住民の生計の確保、安定化及び貧困の軽減を図ると同時に、洪水による被害を最小化することを目指すもの」である。国連の中の24の組織が参加し、水問題に共同



■写真1—ジュネーブ旧市街地



■写真4—WMOでの専門家会議(2005年10月)



■写真5—中国、鄭州での国際会議(2005年10月)

で取り組むための枠組みとして国連水関連機関調整委員会 (UN-Water) があるが、その取り組みの中でIFMは洪水管理に関する重要な概念として取り上げられており、広く普及し始めている。

APFMの主な活動は、以下の通りである。

- ・ IFM コンセプト及び洪水管理政策の策定
- ・ 洪水管理における事例の収集・評価
- ・ パイロット・プロジェクトの実施
- ・ 人材育成(トレーニング等)
- ・ ヘルプデスクサービスによるサポート(ウェブサイトによる情報提供や技術支援等)
- ・ 国際会議等におけるIFMの普及・啓発活動

## 6. 統合洪水管理政策づくりでの苦勞

『統合洪水管理の環境に関する側面 (Environmental Aspects of IFM)』は、洪水管理政策シリーズというWMOの2004年の公式出版物である。これは、IFM コンセプトを実施する上で、主に洪水管理者が考慮すべき重点要素についてより詳細に記載したものである。このシリーズでは、環境、法・制度、社会、経済面について取り上げ、それぞれについてWMO公式文書として出版した。私はその中で、環境シリーズを担当した。ここでは、その製作過程やそこで体験したことを中心に紹介する。

洪水管理と河川環境について考える場合、環境学や生態学、生物学、水文学、社会学等の様々な要素・要因を統合して決定する必要がある。しかしながら、それぞれ異なった背景や視点、用語を用いて持続可能な開発について取り組んでいるため、同じテーブルに載せて議論すると、相手の視点や分野に対する認知や理解の不足からくるコミュニケーション・ギャップが生じる。国や

地域によって取り巻く自然的要因、経済・社会状況が大きく異なるため、相互理解を促進する上で阻害する要因となる。

約1年半という長いプロセスを経て作成された本書の目的は、主に洪水管理者が洪水管理に関連する一連の環境問題を理解できるように作成されたものである。同時に、政策立案者、環境保護団体、NGO、コミュニティが、洪水リスクと環境問題や持続可能な開発との関連について、バランスの取れたアプローチを理解・促進するための有用な情報も提供している。

### (1) 異分野コミュニケーション

草案の作成にあたり、国連や国際自然保護連合 (IUCN) 等の機関と仕事をしている水環境について有識な個人コンサルタントと契約した。打合せではAPFMが考えている本書の概要について説明し、作成する方向性等について議論を行った。その議論の後、草案が送られてきたが、その内容は、河川生態系に関する理念や一般論については非常に優れたものであった。しかし、環境と開発をバランスする上で何の問題や、その問題に対してどのように考えて取り組むことができるのかという、最も重要な点がほとんど含まれていなかった。また、洪水管理の重要性や洪水リスク等を踏まえて、どのような考え方でバランスをとることができるか、という部分が大幅に欠落していた。

上記の内容について、このコンサルタントと議論を行っても理解が得られなかった。自分の専門でない分野の考え方を理解し、異分野間でコミュニケーションをとり、一つのことを作りあげることがいかに難しいかということが分かる。APFMのスタッフは河川工学・水文学を中心としたメンバー構成であり、このコンサルタントは水環

境の専門であった。洪水リスクや開発の必要性、生態系、環境、合意形成、法・制度、順応的管理等、全ての側面を理解して包括的な文章を一人で書くことは、非常に難しいことである。

結局、専門家やWMOスタッフの意見を聞き、草案を大々的に再編集し、あらたなインプットも加えることとなった。私は当時、英語で専門的な文章を書くことに慣れていたとはいえない。短い文章ならともかく、英語で長い文章を作成したり、専門家からのいくつかのインプットを編集し組み込むという経験はなく、全てが新しい挑戦であった。さらに、専門家に意見を聞いても、河川工学の知識だけでは河川生態学に関する文章や、開発と環境のバランスがとれた文章を作成することはできない。そのため、専門家から紹介された文献を中心に読み漁り、専門用語から文章の内容や表現まで、多大な時間をかけて吸収しながら作業を進めた。

異分野の考え方や視点を理解するには、相手のフィールドに入って理解することが大切であると感じた。これは、海外業務等で異なる背景(国や文化を含む)を持つ人間と仕事をしていくという点でも同じであろう。

### (2) 専門家会議の開催

専門家会議を開催するには、適切な専門家の協力を得る必要がある。私達の場合は、WMOや人的ネットワークを通じて複数人とメールで交渉した。また、紹介された専門家等に、国際会議等の際に直接話をして協力を依頼した。作成する文書の内容や目的、私達の意気込みに共感し、会議をジュネーブで開催する際の旅費とDSA(いわゆる日当)以外はすべてボランティアであるにも関わらず、多くの専門家が興味を示し協力頂いた。

ジュネーブで2日間に渡って開催された専門家会議では、様々な国の専門分野が異なる専門家が、ほぼ初対面で議論したにも関わらず、有益な議論を行うことができた。私個人としても、この取り組みを通して今後の活動に有益なネットワークを構築することができた。

### (3) 苦勞して身につく英語力

専門家会議の結果や国際会議で開催したセッションの議論や新たな文献等を基に、統合洪水管理政策の草案を作成した。草案は専門家グループだけでなく、その他国際会議等で興味を持った多くの方にも意見を聞くために配布した。この時に、私が英語で仕事をする中で最も厳しい批判を受けた。しかし、このことが自分を大きく成長させ、結果的に国際社会で対等に生きていくことができるという自信につながった。

一人の専門家から「私も英語が母国語でない者としてフェアな立場で意見を述べる」という前提で、「誰がこの文書を書いているか分からないが、英語がひどい。同じ文章の繰り返し。意味が通じない。一つの文章に多くの内容を詰め込み過ぎて意図が通じない。コントロールされ過ぎた文書である。この文書の修正に1日数時間ずつかけていたが、もう限界である。修正しきれない。途中までの修正内容を参考に再構成して欲しい」というものであった。心底ショックを受けた。もちろん私が担当していない部分への批判もあったが、それで済まされる内容ではなかった。指摘された内容の多くは、公正で正しいものであった。その後、全ての文章を一語一句見直し、ストーリーの再構成と内容の簡潔化を行なった。このために費やした時間は、膨大なものであった。

最終草案が完成した時には、多くの専門家や関係者から、内容について勇気付けられる意見を頂いた。この時の達成感と言葉では表せないものであった。読み手が内容に興味を持ち、有益な情報を活用できる文書を作り上げるには、英語の文章力向上を絶対にクリアしなければならなかった。その意味で、私は批判してくれたことに心から感謝している。改善しなければならないことは山ほどあるが、業務レベルでの英語が格段に上達したことは身をもって感じている。

## 7. 英語の重要性

人によって見解が異なることは承知しているが、私自身は国際社会で働くためには、業務レベルでの英語がどれほど重要であるかを痛感した。会話をするだけであれば、意味がそれなりに伝われば良いかもしれない。しかし、業務の中で使用する、または文書化するのであれば、適切な表現——英語の文章能力等を含む広義のプレゼンテーション能力は不可欠である。なぜなら、そうでなければ誰にも読まれないし、相手に適切に理解されない。これは、日本人が最も苦手とするところであろう。

日本は世界的にみても非常に高い技術力を有しているが、その技術力をもって“本当に必要とされる国際貢献”を行うには、個々の英語によるプレゼンテーション能力を向上させることの必要性を実感した。常に自分自身に磨きをかけて、本当に必要とされる国際貢献ができるように精進していきたい。

<参考資料>  
1) 「洪水管理共同プログラム (APFM) 公式ホームページ (<http://www.apfm.info>)